

ミャンマー（ビルマ）の 赤い大地に立ちて20年

宮下 亮善



ミャンマーは、南シヤン州の山岳民族の住む地域で、教育支援活動をして、20年の歳月をむかえる。現在、ミャンマーは、このところの民主化で、最後のフロンティアとして、多くの日本企業が草木もなびくが如く、資本投下を急いでいる。20年前の年間所得は2万円から3万円、それが今では、10万円を越し、勢い物価は高騰し、ヤンゴン市内の事務所の家賃が東京より高いという状態である。山岳地帯の土地も華僑に買い占められ、あんな荒れ地がどれ程のものかと思われるが、将

来の値上がりを見越して、土地転がしが行われている。市場経済はつまるところ、弱肉強食の原理、都市と地方との経済格差を生み、貧富の差を助長し、農村から都市部へ仕事を求めて、人口移動が活発化するであろう。都市への一極集中、地方農村の過疎化が顕著となるものと考えられる。

永年の軍事独裁体制の矛盾をどのように解消するのか、新政権の前途は非常に険しいものがあります。ミャンマーは誰が政権を担おうが、憲法改正、少数民族との和解と、宗教問題が大きいのしかかっています。民主化で言論の自由や表現の自由が保障されたことは、非常に素晴らしいことではありますが、スーチーさん率いる新政権の舵取りの失政がないとの保証はありません。昨年、現地にまいました、新政権は日本の民主党のようになるのではないかと危惧されているとい

ます。

『和尚さん、ご苦労さまです。私はインパール戦線の生き残りです。タチレイクの捕虜収容所に居ましたが、インド兵のパトロールが居なくなると、毎日、ビルマ人が、日本の兵隊さん、このおにぎりを食べてくださいと柵越しに『おにぎり』を差し入れてくれた。

私は、この『おにぎり』で、命をつなぎ無事に日本へ帰って来ました。』と。また、ヤングンのレストランで紹介されたミャンマー人老記者は、『和尚さん、日本兵はビルマに戦争に来たのではない、イギリスと戦うために来てくれた。日本人よ、しっかりしてくれ、我々は日本人に感謝している。』また、マンダレーヒルの日本人慰霊塔の掃除をしているミャンマー人は、『日本の兵隊さんのお蔭で、ビルマは独立できた。だからこうして、掃除をしている。日本の兵隊さんに感謝している。』

日本では考えもしないことを、ミャンマーの人々から聞かされ、同じ日本人として恥ずかしい思いと申し訳ない思いで涙腺が緩むおもいであった。戦争は憎むべきことではあるが、そのために亡くなった英霊を侮辱してはならない。今だ帰らぬ遺骨が何万と、その望郷の念を抱いて眠っております。このことを機縁に、南シャン州カックパタゴの北の岡に、ビルマ戦線敵味方全戦没将兵慰霊のための『ラインクン地涌パタゴ』を建立しました。高さ15メートル、その建立資金は700万円であった。

ミャンマーの山岳民族の子供たちのために、教育支援をするのは、ミャンマーの子供たちが貧しいから支援しているのではない。私たち日本人が豊かな生活を享受するなか、一方では、貧困を助長しているという現実があります。ミャンマーの子供たちは僻んでもいま



ラインクン地涌パコダ
ビルマ戦線敵味方全戦没将兵慰霊の為
2004年12月建立・高さ15メートル



ラインクン地涌パコダにて、ビルマ戦線敵味方全戦没将兵慰霊法要の様子。2004年11月24日。“遥かなるビルマ同胞よ安らかなれ”

せん。妬みもしません。笑顔がかわいいです。

目の玉がキラキラしています。『貧しいことは、恥ずかしいことでは無い、本当に貧しいことは、貧しいことを恥ずかしがることである』と、ミャンマーの子供たちから学びました。

そして、今だ、彼の赤い大地に眠る日本人将兵の誇りを失わないために、彼らに替わり教育支援を行っている。年間の学費が10000円足らずの奨学金の申請書に、子供の顔写真の添付を求め奨学生の募集を行いました。

ところが、ある村の家族からは、申請書が届けられなかった。私たちが、その村の親に会い理由を尋ねたら、「学校に出したいけれど、申請書に貼る写真代がない」との返事でした。その写真代、わずかに『4円』。日本の社会では考えられない話です。豊かな国の発想とその愚かさを思い知らされ、申し訳ないことをしたと反省しきりでしたが、このこと以来、

写真の添付は廃止しました。また、日本人カメラマンが、マニラのスモークンマウンテン

で、空き缶や空き瓶を集めている10歳の女の子に「あなたの将来の夢は何ですか」と尋ねたら、その女の子は「私の将来の夢は『大人になるまで生きる』ことだ」と、これが夢ですか。シヨッキングな話です。大人になるまでが、困難なことであることを意味している。ミャンマーの少数民族の村では、竹と茅で出来た教室で勉強しています。この20年間で59校の小学校、中学校、保育園、寮を建設支援して来ました。雨風から守られた安全な校舎で子供たちが勉強をし、村づくりや国づくりに励んで欲しいと思っております。ミャンマーは貧しいために、政府が山岳地域の村に学校を作ってくれる財政基盤がありません。山村に行くほど教育施設は整っていませんが、日々の生活に追われながらも、子

供たちに教育の機会を与えたいと思う親はとも多いのです。

私たちの支援は、全面的な支援はしません。「自助努力なきものに支援なし」として、村人たちに『自立』を求めており、建設資材のみを支援し、村人たちの労力奉仕を条件としています。

また、1999年からシャン州インレー湖のほとりにあるニャンシュエ郡教育事務所管轄下の中学校、高校の子供たちを対象に奨学金貸与の支援事業も行っています。経済的理由で進学できない子供たちを各学校から推薦してもらい、現地協力者が面接の上受益者を選抜し、中学生に年間800円、高校生に1200円の奨学金を卒業まで、毎年貸与しています。もちろん、卒業後は働きながら、奨学金に返済することを条件としています。

私たちの奨学金制度は、3つの特筆する活

動を現地にもたらした。

〔その1〕現地の先生方を動かし、郡教育委員会管理下の小中高の先生たちが、毎月の給与から、奨学金基金を作って貸与を始めた。

〔その2〕医者、事業主など、民間ボランティアも出資して、奨学金基金作り活動を始めた。

〔その3〕2006年から、奨学金の返還が始まりました。

途上国では、貰い放しがほとんどですが、非常に稀有なことです。『自立』の心が根付いている証しかと思っております。途上国では、貰うのが当たり前の世界です。

ちなみに、奨学金義貸与者は2016年現在、1700人を超え、内、200人が大学を卒業している。国際弁護士、医師、小中高の教師、エンジニア、公務員、助産師、軍人など、彼の国の有為の人材として、活躍しています。

もとより、海外における支援活動の目的は、

彼の国の国づくり、くに資することであり、国づくりは人づくりでなければなりません。なかなか、教育支援は『建国の基礎』であればまさに『自立』を促すことでなければ、真の支援とはいえません。そして、さらには、そのことを意識する、意識しないにかかわらず、日本にとつての国益に資することでもあります。なぜなら、日本人の支援に感謝こそすれ、悪口は言わないでしょう。結局のところ、国際関係も互いの国の信頼関係で成り立っているからである。私たちの活動も微々たるものではありませんが、この20年の間、延べ人数およそ50000人もの子供たちが各学校で学び巣立っています。

物事には陰と陽、笑う人あれば泣く人あり、怒る人あれば喜ぶ人あり、豊かな人あれば貧しい人がいるように、地域と地域、国と国と

の関係においても、様々な明暗が存在します。物質文明を何不自由なく謳歌する人々もあれば、その貧困のために子供を人身売買する人々もいます。

世界中には、8億を超える人々が飢餓に苦しみ、栄養不足に悩む子供たちが1年間に600万人存在し、世界人口の2割の先進国の人々が8割の消費を占め、安全な飲み水さえ飲めない人々が17億人も存在する。

私たち日本人が世界中から輸入する1年間の食料はおよそ5400万トン、そのうち650万トンは『残飯』として廃棄されている。日本人の食生活はもはや輸入なしでは成り立たない状態である。

世界中から食料や資源を輸入し、消費し、豊かな生活を享受するなか、途上国においては飢餓に苦しむこの矛盾を私たち日本人はどのように考えたらいいのでしょうか。

『世界中の消費の大部分は圧倒的に豊かな人々に集中しているが、その消費がもたらす環境破壊は貧しい人々に最も深刻な影響を及ぼしている。貧困と環境破壊はしばしば相乗的に悪循環をもたらす。過去における資源の劣化が今日貧困を深刻化させているが、今度はその貧困が原因となって農業資源基盤の維持、回復が困難となり、森林伐採に代わり、砂漠化を進め、土壌の侵食を促進し、地力の回復を遅らせる悪循環を引き起こしている。』
(UNDP国連開発計画(消費パターンと人間開発) 抜粋)

このような指摘は、ミャンマーの南シャン州インレー湖周辺でも顕著にあらわれている。燃料木の森林伐採による土壌劣化が進み、山地一帯が侵食谷(ガリーズ)を形成している。植栽不能な赤茶けた大地がむき出しになっている。

世界の人口は、2050年には90億人、うち80億人が途上国に集中する。この規模の人口に対して十分な食料を供給するには、現在消費されている基本カロリーの3倍、穀物に換算して、年間100億トンの食料が必要となる。ちなみに、この地球の人口許容能力は60億人といわれている。現在の人口は65億人である。

ニャンシユエ第1中学校の女の子の家は、3年前母が亡くなり、父と2年生の妹の3人家族ですが、その小さな家には3つの家族10人が同居しており、台所ともう一つの部屋には雨が降っていました。第2中学校の女の子のお母さんは奨学金が貰えることになり、教育がづけられると大泣きして喜んだ。ニャンシユエ高校の男の子の家は、3年前に両親が離婚し、母と3人の子供で暮らしており、6年生の子は二人の弟妹の面倒を見なが

ら、働く母を助けその時より毎日3度の食事を作っている。雨の中家庭訪問をしている中、雨漏りではなく2軒の家では家の中に雨が降っていた。レモングエには5つの村があり、パンティン・タイエーピンの村は、現在の学校から2マイルほど離れている。小学生の足で1時間ほどかかるためほとんど学校に行けずにいる。他の村においても村の生活環境の厳しさから、先生の給料不足から先生が山に登ってこず、現在ある小学校も学校が開かれない問題を抱えている。イエベ小学校のほとんどの子供は、裸足で通っている。1年生のある子供は、自分の弟を負ぶって勉強をしていた。

キョン村は、人口2700人、戸数508戸、7つの村で構成されている。飲料水はすべて天水でまかなっており、雨季の間に溜めた水で十分賄えるとのことであった。村の中



ニャンシュエ教育事務所で奨学生に挨拶する宮下代表（2015年11月20日）



ニャンシュエ教育事務所庭にて奨学生等との記念撮影（2015年11月20日）

で車をもっているのは、10名程度である。レモングエ村は、人口2000人、戸数450戸、8つの村で構成されている。村の中に小学校が3校、寺が3つ、村の一番の問題が水である。2月から7月の半年間は、毎日2時間半かけて、山の下の方の井戸まで汲みに行く。このような状態なので、教育に対する村人の関心は薄く、一番大きい学校の小学生はわずか2名である。その他に、山の人たちはヨウド分が不足するために、甲状腺肥大の問題も抱えている。

以上が、現地の現状であるが、貧困がいかに村人の生活に影響を与えているかがわかります。現在の日本では想像もつかない途上国の実情です。ミャンマーが民主化されたとはいえ、都市部のインフラ整備からであれば、山岳地帯への環境整備は相当の時間を要するかも知れません。

いずれにしても、教育は建国の基礎であれば、その人材教育は彼の国にとって重要な問題である。

昨年訪れたニャンシュエ教育事務所での奨学生との面談で、『私たちはミャンマーの国の宝になる』と所信を述べていました。まさに、『私たちが期待する人材の育成が根を張り、枝を伸ばし始めたことを確信した訪問であった。彼らが、ミャンマーという国の有為の人材として活躍し、もって日本とミャンマーの善隣友好の懸け橋となってくれるならば、これに過ぎる喜びはありません。』

終わりに、ミャンマーの人々は、『鎌倉の大仏』が大好きです。どうして鎌倉の大仏を拝むのかとききましたら、『鎌倉の大仏を拝むと日本に行ける』という憧れがあるのだと聞かされました。『親日国ミャンマーに幸あれ』

(天台宗大雄山 南泉院住職)